



この映画は
生き残った者の真実の叫びであり
亡くなった友への心の奥底からの鎮魂の思いを
綴ったものです。
生存者はほとんどが80歳を越えました。
いつかは消えてなくなりず。
でも何年たつてもこの映画は
ひめゆりの記憶を後世に確かに語り継ぐ
大事な財産になるだろうと信じています。
ひめゆり学徒生存者 本村つる

来年も再来年も、
ずっと未来も上映されますように。
～長編ドキュメンタリー映画「ひめゆり」を観て

今日は6月23日。沖縄戦から71年目の「慰霊の日」。最後の激戦地だった糸満市摩文仁にある平和祈念公園では、今年も沖縄県主催の沖縄全戦没者追悼式が開かれた。翁長雄志県知事は平和宣言を誓うと共に、米軍普天間飛行場の移設について許容できないと言い、参列した安倍晋三首相は「基地の負担をひとつひとつ減らしていきたい」と述べた。

この数日前、東京のポレポレ東中野で長編ドキュメンタリー映画「ひめゆり」を見てきた。毎年沖縄慰霊の日に合わせて上映しており、今年で10回目。初日に行ったら席はだいたい埋まっていた。

東京生まれ、本土育ちの監督柴田昌平さんは、13年もかけてひめゆり学徒の証言を集め、長編ドキュメンタリー映画「ひめゆり」を製作した。彼女たちは撮影時に70歳を越えており、2007年の映画完成前に3名亡くなった。映画を観て欲しかったけれど、お話を伺えてよかったと思う。映像はずっと残せるし、これから多くの人に観てもらえるから。

映画は1945年3月23日、ひめゆりという愛称で呼ばれていた沖縄師範学校女子部と県立第一高等女学校の教師と生徒たちが、従軍看護婦として沖縄陸軍病院へ派遣されることから始まる。病院や壕、米軍から隠れていた海辺などの現地で主に撮影し、その証言は沖縄戦から71年経ったとは思えない生々しさがある。語っている映像の一部に学生時代の写真も映し出され、出身地や当時の部活や趣味についても紹介。テニスやピアノが好きだったり、陸上の選手もいた。出身地は沖縄本島だけでなく石

垣や他の島からも来ており、学校には寮もあつた。生徒たちは成績のいい快活なお嬢さんたちが多かったようだ。

15歳から19歳の女の子たち。従軍する前に軍医から看護について教育は受けたけれど、そもそも看護学校の生徒ではない。彼女たちの仕事は兵士の看護だけでなく、水汲みや食べものの配膳、死体の埋葬もなんでもしたそうだ。初めて腕を切断する手術に立ち会った少女は、切断したばかりで体温の残る手を渡され、ゴミ箱に捨ててくるように命じられる。気丈に受け取り歩いていたら、軍曹に「すごい女だな」と言われ、自分は従軍してからわずか1ヶ月で血も涙もない人間になってしまったと感じ、ショックだったと語る。気が付いたら自分のことばかり考えるようになっていたと語る人もいた。でも彼女たちには、横になるベッド

もなかったのだ。

3月の動員で従軍した少女たちは222名。解散命令までに19名が亡くなった。6月18日の夜、突然「解散命令」が言い渡される。明け方にはここを出て自分たちの判断で逃げろという意味だった。米軍はとっくに上陸して日本兵も沖縄の人たちも逃げる場所はどこにもない。その中で生き残った生徒は22名。解散命令の後の数日間で180人あまりが亡くなった。政府から見捨てられた人たちだ。そもそも沖縄戦がそう思える。

証言したひめゆり学徒のみなさんは上品な身なりの人ばかりだ。話す内容は整理されていて聡明さがにじみ出る。生き残った意味を考え、体験を語ってこられたみなさん。涙をこらえながら、辛そうに思い出しながらの証言で、わたしは戦場の様子が映像として思い浮かんだ。過酷な状況の中で支えあってきた友達や尊敬していた先生、日本兵も、ぼろきれのように亡くなっていく。身体の部位が飛び散っていく。自分のいのちを手榴弾で断ち切っていく。

戦争とはどういうものなのか、いのちはどう扱われるのか。そして、わたしたちは、戦争をしない道に進むのか、戦争をする国にするのか。本当にいま問われている。

日本各地の行政などで空襲や戦争関連の企画展をこじんまり続けているところが多いように感じる。それだったら「ひめゆり」を上映しませんか。沖縄市のくすぬち平和文化館ではこの映画を毎月上映しています。戦争体験のない人にも大事なことが伝わるはず。「ひめゆり」がこれからもずっと上映されますように。子どもたちに、海外の人たちにも、ひめゆり学徒隊の声が届きますように。

